

鑑賞教育に力を入れよう！

美術教育専修 野村幸弘

1

今回は、多治見と高山から中学校の先生が二人来られた。ともに美術の授業のなかで、すでに鑑賞教育の実践をされているのだが、どうもしっくりこないものを感じておられるようだった。

お二人とも、とくに日本の美術を鑑賞の授業で扱いたいという意向をもっておられた。それについては、わたしも同感である。

わたしは大学で毎年「日本美術史」の講義をしているが、受講する学生たちはほぼみな、日本美術に対していい印象をもっていない。いや、それどころか、すばらしいのは西洋の美術であって、日本美術は西洋にくらべてはるかに劣ると思っている。しかも、彼ら彼女らは、ろくに日本の美術を見ていないのに、そんな判断を下しているのだ。なんの根拠もなく、憶測だけで日本の美術をそんなふうに認識しているのである。

どうしてそんな奇妙なことが起こるのか。おそらく小学校から高校まで、日本美術の良さを知る機会がほとんど与えられていないのだろう。いや、機会がないわけではないのだが、日本美術は社会科のなかで歴史的資料として扱われることが多く、図画工作、美術の時間のなかで、その美的価値について教えられることがあまりないのである。このように推測するわけは、わたし自身、小学校から高校まで、ほとんどだれからも日本美術はすばらしい、などというような話を聞いたことがないからだ。そしてここ40～50年、こうした状況はそれほど変わっていないと私は感じている。

問題のいったんは、やはり小・中学校の図工、美術の授業にあるとわたしは考える。日本美術にはどのような価値があるのか、日本美術は面白いのか、詰まらないのか、そういうことを学ぶ時間は、図工、美術の時間しかないからだ。けれども、これまでの図工、美術は実技、制作が中心で、美術の良さや価値はどこにあるのかを評価、判断する審美眼を養うことに重きをおいてこなかった。そのため、他者から評価してもらうことばかりに汲々として、他者を評価する視点をなかなか持てないでいる。日本美術は、これまで中国や欧米など、外部から評価されることによってはじめて、自らを認めてきた。つまり、つねに外部からの「お墨付き」を求めてきた。とはいえ、じっさいには日本の視点から中国美術を評価してきた歴史もあり、日本に他者を評価するということがなかったわけではない。

他の国や地域の美術を評価し、と同時に自分たちの美術をきちんと評価するという視点は、鑑賞を通して、審美眼を養うことから得られるものだ。そうした教育が、今後、図工、美術の授業のなかで効果的に行われれば、少なくとも、なんの根拠もなしに、日本美術は詰まらない、などと憶測で語るような状況は改善されて行くと思う。

2

そこで、わたしはひとつの方法を提案してみた。日本の美術を一点取り上げて、それを日本以外の国、地域の美術とくらべてみる、という課題を出したのだ。

2週間後に、お二人がそれぞれ用意された何点かの美術作品の図版から、ひと組をここで紹介することにしよう。それは、中学校の美術の教科書に載っているもので、しかも先生がお二人とも、この研修のあとに、じっさいに鑑賞の授業のなかで取り上げるようになった教材だからである。

選ばれた日本の美術は、葛飾北斎（1760～1849年）の「富嶽三十六景」のなかの《江戸日本橋》（1831年 図1）。そして北斎の浮世絵版画と比較するのは、18世紀イタリアの画家カナレット（1697～1768年）のヴェネツィアの風景を描いた油彩画《大運河》（テキサス州ヒューストン美術館 1730年ごろ 図2）である。



図1 葛飾北斎《江戸日本橋》



図2 カナレット《大運河》

ふつう美術作品というのは、一点一点見るわけだが、そういう見方だと、それが巧いとか下手とか、好きとか嫌いとか、あるいは、そこに何が描いてあるとか、そんな印象だけで終わってしまいがちである。ところが、2つの作品をくらべながら見ると、じつにさまざまなことが見えてくる。見くらべるときに重要なのは、両者の作品の似ているところと異なっているところに注目することである。

これなら、小・中学生でも、かなりの確な指摘ができる。じっさいの授業でも、生徒たちが次のような類似点に気がついている。

- ・川の両側に建物がある
- ・舟の形が似ている
- ・奥行きがある

北斎もカナレットもともに運河の風景を描いている。運河の両脇に建物が並び、水面には数多くの輸送船が浮かんでいる。18世紀初頭のヴェネツィアと19世紀初頭の江戸の街の風景がこんなにも似ていることにまずは驚く。2つの作品の制作年には、約100年の開きがあるが、北斎は、カナレットのこの種の風景画をじっさい見たのではないかと思うほど、両者は似ている。

北斎がカナレットの作品を知っていたかどうかはともかく、似たような風景画を北斎がじっさいに見ていたことはたしかである。というのは、北斎の浮世絵版画には、ヨーロッパで誕生した遠近法が用いられているからである。

北斎の版画には、遠景に富士山が描かれ、運河沿いの蔵も、絵の中の人物もすべて江戸情緒を感じさせるものばかりで、いかにも日本的な情景が表現されているわけだが、この作品の構造自体は、じつは完全にヨーロッパのものである。見かけは日本的だが、中身はヨーロッパなのである。北斎の版画がカナレットの油彩画に似ているのは、見かけというよりも、むしろその構造にある。

つまり両者の最大の共通点は、遠近法なのだ。

生徒たちは、それを「奥行きがある」というふうによく理解している。作品を見くらべることによって、そういう重要な点に気がつくのである。

3

それでは、相違点はどうか。生徒たちの指摘によれば、次のようになる。

- ・カナレットの方は、影があって本物っぽい
- ・北斎の雲はマンガっぽい
- ・舟の形がちがう
- ・カナレットには橋がない
- ・北斎には煙突がない
- ・北斎には山と城がある

細かく見ていくと、当然のことながら、相違点は類似点よりもはるかに多いだろう。これらの相違点こそが、それぞれの作品の特徴ということになる。相違点を見つければ見つけるほど、個々の作品の個性がきわだってくるだろう。相違点を見つけようとするとき、両方の作品をかなり注意深く観察しなければならない。この観察が、結果として作品の理解を深めることになるのだ。

言葉の使い方の巧拙はおくとして、生徒たちはかなり重要な点に気づいている。「影があって

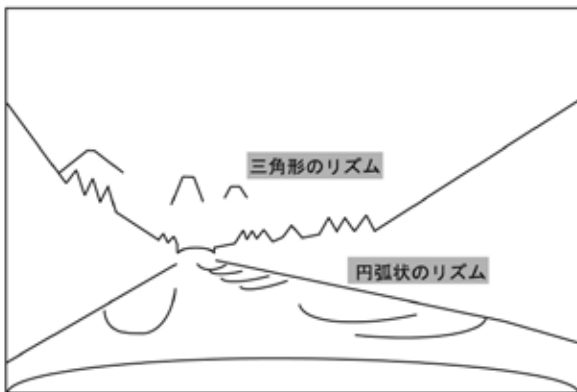


図3 葛飾北斎《江戸日本橋》

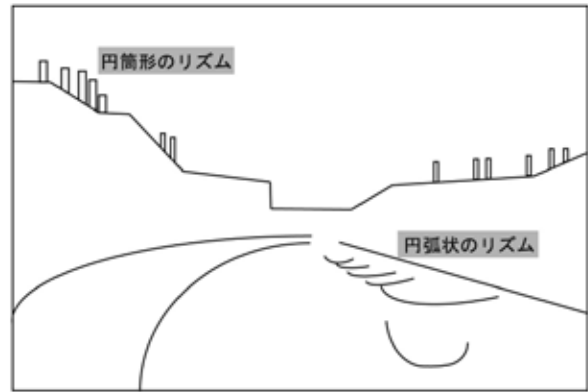


図4 カナレット《大運河》

本物っぽい」というのは、カナレットの絵では、陰影法が使われているということを示している。たしかに北斎は、ヨーロッパの遠近法は取り入れたが、陰影法にはほとんど関心をもたなかったことが、こうした比較から分かる。北斎の版画には、影らしい影が見当たらない。そのために「マンガっぽい」という感想も出てくるわけだ。生徒たちは、リアルな表現とマンガ的な表現のちがいははっきりと感じとっている。その理由が陰影法の有無なのだ。

「煙突がない」「山と城がある」という、生徒たちのいっけん素朴な指摘も、じつは作品にとって重要な意味をもっている。カナレットはじっさいのヴェネツィアの風景をかなり忠実に、また北斎もある程度、実景を再現しようとしているだろうから、カナレットの絵に煙突のついた建物が描かれ、逆に北斎の版画に煙突が描かれていないのは当然のことではある。

しかしながら、カナレットによる煙突の描写は、あきらかにこの絵に視覚的なリズム感を生み出している。それと同じような効果が、北斎の場合、煙突ではなく、蔵の屋根の形状によって達成されている。そしてこれら蔵の屋根の三角形は、じつは遠景の富士山、そして徐々に高さを変えて行く2つの城郭の形状と呼応するように表現されているのだ（図3・図4）。

カナレットも北斎も、煙突の円筒形と屋根の三角形というぐあいに、扱っているモチーフは異なるものの、同じ形の反復によって生まれる視覚的な効果に対して非常に敏感なのである。もちろんカナレットと北斎が、建物、蔵の窓のリズムにも意識的であることはあきらかである。

こうして両者をくらべてみると、ともに絵画が幾何学的に構成されていることが、はっきりと見えてくる。北斎が絵画の幾何学に多大な関心を払っていることは、たとえば、彼が著した「絵手本」である『りやくが はやおしえ略画早指南』を見れば分かる（図5）。あらゆるものが幾何学形態から構成されていることが図示されていて、興味深い。これは、ヴィラール・ドゥ・オンヌクルの画帖から、ピエロ・デッラ・フランチェスカ、レオナルド・ダ・ヴィンチ、デューラーの人体比例論（図6）まで、ヨーロッパの絵画表現に通じるものがある。

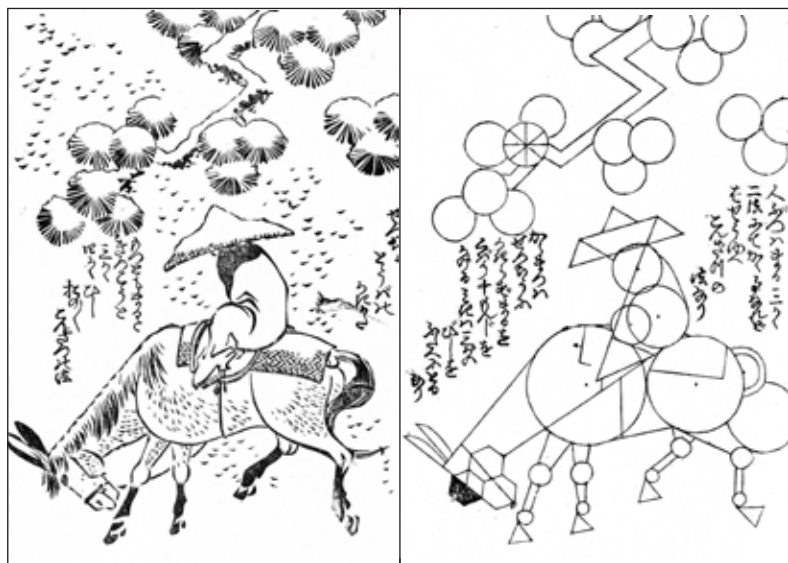


図5 葛飾北斎『略画早指南』



図6 アルブレヒト・デューラー

4

カナレットと北斎が画面を幾何学的に構成しているということは、じつは別々の生徒がそれぞれ類似点と相違点として挙げている「舟の形が似ている」と「舟の形がちがう」というような、いっけん矛盾した言い方のなかにも隠されている。

ヴェネツィアのゴンドラと江戸の木船の形そのものがちがうのは、だれが見ても自明のことだが、「舟の形が似ている」というのも、ある意味でまちがってはいない。というのは、カナレットでも北斎でも、湾曲した舳先の形が似たような円弧状のリズムを作り出し、しかも、それらの舟が運河に沿ってほぼ直交する形で停泊して、横一列に並んでいるからである。

そればかりではない。

数あるなかで一艘だけ、縦に航行している舟が絵に動きを与え、同じような視覚的効果をあげているのである。そのことから、個々の舟の形状はもちろん異なるものの、全体として「舟の形が似ている」というふうに見えたとしても、なんら不思議はないと言っていい。いやむしろ、カナレットも北斎も、舟の配置に関して、じつに入念な計画を立てて、絵を構成しており、その構成の仕方、構成の感覚が非常に近く、相違よりも類似性を強く感じさせているのである。生徒たちが何気なく素朴に気づいていることには、じつは深い理由があり、そこに言葉による論理を与えていくことが鑑賞の重要なポイントなのだ。

「カナレットには橋がない」。この指摘も、何でもないので、じつは非常に示唆的である。これは逆に言うと、「北斎には橋がある」ということだ。北斎の「江戸日本橋」だけを見ていて、この版画に橋が描かれていることに注意するひとはあまりいない。この版画のタイトルが「日本橋」であるにもかかわらず、である。

よく見ると、北斎の版画では、運河に橋が2つ架かっている。遠近法の消失点付近、絵のいちばん奥に小さな太鼓橋がある。橋の上にはまったくひと気がない。もうひとつの橋は、反対に絵のいちばん手前、橋の上の賑わいのある往来、雑踏が描かれている。高欄部分は描かれているが、橋の本体が絵の下辺でカットされているので、この橋の存在に気づきにくいのである。

北斎の版画は、絵の左右を運河の岸辺で区切り、向かって右岸に横向きの停泊舟を並べ、左岸に縦向きの舟を一艘浮かべている。そして絵の前景と後景を、2つの橋できっちりと区切り、前景にはダイナミックな賑わいを、後景には無人の静けさを表現している。つまり絵の前後左右をきわめて対照的な表現にしているのである。こうした詩学、つまり芸術表現上の工夫は、カナレットをはるかに凌駕していると言わなければならない(図7)。

そしてさらに秀逸なのは、前景の橋の大きな円弧が、運河に浮かぶ舟の円弧に、上下を逆にして受け継がれ、円弧の長さが少しずつ縮まり、最後は、またもういちど回転して後景のもっとも小さな円弧の橋で終わるように設計されていることだ。橋が舟になり、舟が橋になる。じつによく考えられた絵というほかない。

ヨーロッパの遠近法は、15世紀のアルベルティが言っているように、窓から見た世界が再現されている。窓枠で区切られた矩形の明快な世界が絵画となる。窓枠の中から障害物はすべて排除されるのだ。

ところが、北斎の版画では、窓枠の下辺から、大勢の人々の頭部と荷物が「はみ出ている」。人々の下半身はぱっきり切り取られている。こんな奇抜な人物の登場の仕方は、まずヨーロッパの絵

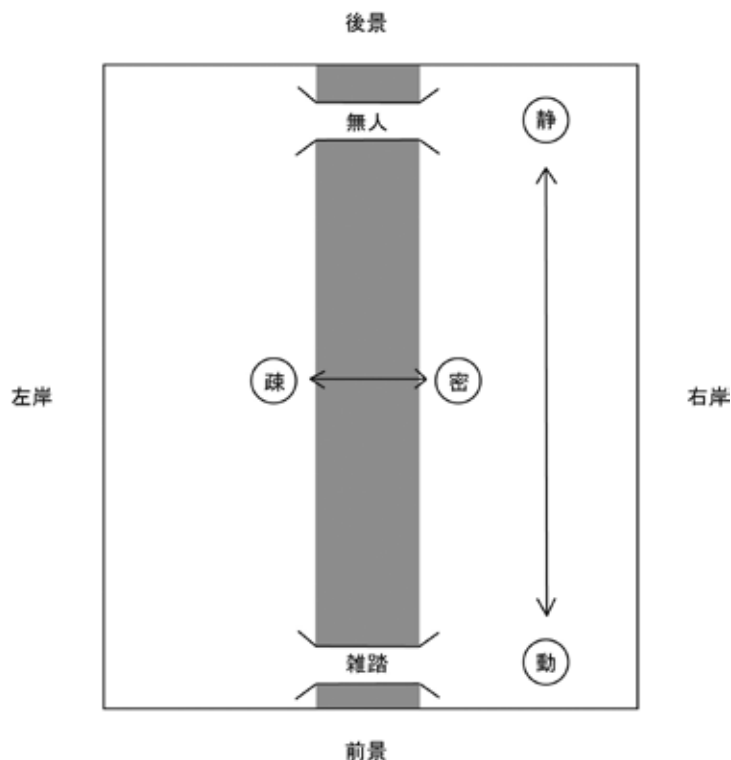


図7 葛飾北斎《江戸日本橋》平面図

画にはない。遠近法とは、画面の奥行きを説得的に示す方法であって、その逆向きの画面の手前にあるものを描き出すものではないのである。

北斎の版画の主要テーマは「日本橋」である。にもかかわらず、その橋の本体はおろか、往来の人々の姿も、下半分をばっさり切ってしまうという大胆なトリミング。

ヨーロッパの画家にとって、もともと「遠」を表現するためにあみだされた技法が、日本に入ってくると、逆に「近」を表現するものに変換されたわけだ。これは遠近法の使い方の「コペルニクスの転回」と呼んでもいいような事態であって、非常に画期的なことである。そのことに真っ先に気づいたのが、ドガであり、ロートレックであり、ゴーギャンだった。

5

鑑賞の授業を終えて、お二人の先生はともに「鑑賞をするには、同じ主題の作品をペアで見せて比較させるといいということを学んだ。そうすると、似ている所や違う所がわかり意見が言いやすい」、「2つの作品を比較することで、様々な見方をすることができた」、「とても効果的な鑑賞の仕方だと感じました」とコメントしている。

また、授業を受けた生徒たちの感想には、次のようなものがあった。

- ・カナレットの絵は影があって立体的でした。浮世絵には影がないことが分かった。
- ・北斎とカナレットの絵は同じように見えるのに、違う遠近法が使われていることが分かってびっくりしました。
- ・北斎は西洋の透視図法に関心を抱いて熱心に研究をし、真似するだけでなく、このよう

鑑賞教育に力を入れよう！

な描き方を考えてすごいと思った。

・北斎の浮世絵もカナレットの絵もどちらもそれぞれいいと思いました。

作品を比較することは、かならずしも両者に出来不出来、良し悪し、優劣をつけるためではない。むしろだいじなのは、2つの作品のそれぞれの良さや特徴を際立たせることにある。北斎が、カナレットのようなヨーロッパの風景画から何を学び、それをどのように理解、咀嚼し、発展させたのか。そしてその成果は、北斎のその後の作品のなかでどのように展開していったのか。そのプロセスをていねいに見ていくことが、次の鑑賞の授業へとつながっていくのだと思う。